

◆全体の原稿が少なくページ数が減っている。が、年長者にもかかわらず書く意欲にあふれる市川茂子さんに刺激を受けている。原稿が二枚以上になるときは右上を糊付け。結社の決まりが身に付いているのだろう。締め切りに間に合いそうもないときは速達で来る。「速達でなくていいですよ」と伝えてからは普通便になったが、編集部として背筋が伸びる瞬間である。

今回、河村郁子さんの短歌はお休みです。

◆「谷地ひなまつり」でバザーをおこなった。「地域食堂クレヨンピット」のアピールと資金集めが目的だ。雪国ゆえ、河北町谷地のひなまつりは昔から月遅れである。ひな市も立つ伝統行事だが、コロナ禍で四年ぶりのひなまつりとなる。バザーの話があつたのは三週間前。「肉そば研究会」が肉そばの店を開くにあたり、店先を貸してくれるという。準備期間が短く不安はあつたが、秋に向けて試しでやってみることにした。乗り気になった約二名のうちの一人ということで自分が責任者になってしまった。

手作り品は何にするか。さいわい友人が送ってくれた生地がたくさんあるので、ポーチと腕カバー（シヨート丈）を作れるだけ作ろう。ひとり家内工業のおもむきで、がんがん作った。自分ではなく誰かのためなら力が湧いてくる。不思議だ。ポーチ十八個、腕カバー十二セット、仲間にするつもりのエプロン一着が完成。追いつめられたからこそできた芸当（祖母の十八番）だ。釣り銭も用意。ほかに仲間が茶器セットなどを提供してくれて、なんとか見通しが立った。

当日は暖かく、快晴。朝九時ごろから人が出てきた。預かり品の値段付けやポップはゆっくり書こうと思っていたのに、客の対応に忙しくままならず。急いで「地域食堂クレヨンピット・バザー」「地域食堂の資金になります！」と書いて、あとは口頭での説明。当日手伝いの人は呼び込みが上手で、地域食堂のチラシを配りながらよく売ってくれた。お釣り銭を募金箱に入れてくれるお客さんもいた。春の最初のお祭りとおあって地元民に限らず、近隣の村山、東根、寒河江あたりからの人も多く、また仙台から来たという人もいて盛況だった。当日持ち寄った物品もあり、バッグやキャラクターグッズ、ぬいぐるみ、電子キーボード等も並べたが、一目目であらかた売れてしまった。その様子を見かねて、そば研の人が「あした洋服を持ってくる」と協力してくれることに。天気が味方してくれて二日間の売上は思いの外あった。店頭でのやり取りがおもしろく、自分たちも楽しめたことがいちばんの収穫だったかもしれない。二日間のイベントは終わった。秋のバザーに向けて弾みがついたことは間違いない。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊 展景
109号

二〇二三年四月二十五日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一七―二〇二

info@muninokai.com